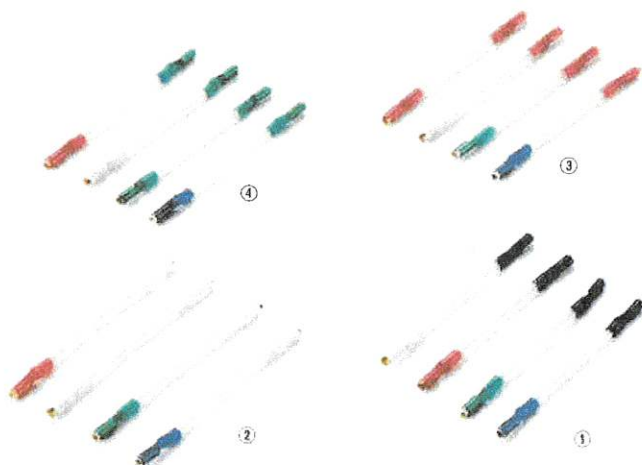


Text by
炭山アキラ
Akira Samiyama
Photo by 田代法生

直近5年間に蓄積した技術と経験を新投入

シェルリード専門工房KS-Remastaの 鏡面加工導体Stageシリーズが第二世代に進化

KS-Remasta 第二世代 鏡面加工導体Stageシリーズ

KS-Stage121EVO.I ①

 ¥16,500(税込)
Stage101の後継品、最終仕上げ10000番(4段)

KS-Stage221EVO.I ②

 ¥27,500(税込)
Stage201の後継品、最終仕上げ20000番(6段)

KS-Stage321EVO.I ③

 ¥38,500(税込)
Stage301の後継品、最終仕上げ30000番(8段)

KS-Stage621EVO.I-VK ④

 ¥66,000(税込)
Stage401の後継品、最終仕上げ60000番(10段)

※海外製高純度OFC直径0.6mm単線と、ハンダ「KS-Remasta EVO.I」は共通。「Stage621」のみEVO.Iに天然松ヤニVKをプラス
 ※全モデルとも4本セットで、標準品の長さは全長43mm。長さ100mmまで同一価格(DL-102などのモノラル仕様や、MITCHAKU-Zシェル用85mmなどの受注も可能)
 ※第二世代Stageシリーズ発売記念として「KS-Stage221EVO.I」税込¥27,500を、期間限定(2022年12月31日まで)で20%OFFの¥22,000で販売



KS-Remastaのフォノケーブル「KS-PHONO-001/EVO.I」(¥110,000 1.5m、税込)と、インターコネクト「KS-RCA-001/EVO.I」(¥110,000 1mペア、税込)。長さは2メートルまで同一価格



試聴用カートリッジとシェルには、KS-Remastaレファレンス機ZYX Ultimate 100とLive18 Headshellを使用

**磨き上げに新手法を導入した
第二世代4モデルを比較試聴**

シェルリード工房KSリマスタの柄沢伸吾代表は、あのちっぽけなシェルリードへ魂を吹き込むことにかけて、おそらく世界でも類例を見ない職人だと考えている。柄沢氏はハンダづけの面を、精密に研いだナイフで削る方法論を確立。その手法は近年ますます元進し、研ぎの技

術が一層向上するとともに、一度研いだ刃物で何本の芯線を削るかという方向へも進み、最上の音を得るなら1本の芯線を削るだけで研ぎ直さねばならない、との境地へ至っている。決してそれはオカルトの類ではなく、私の耳へもその違いがはっきりと伝わってくるから恐ろしい。また、単線はその表面をコンパウンドの番手を変えて何度も磨いた鏡面仕上げとし、それも音質へ大きく貢献する。今回はコンパウンドをより粗い番手から順に磨き上げる新手法を採用したシェルリードをテストする機会に恵まれた。試聴条件を整えるため、フォノケーブルとインターコネクトも同社の製品に挿し替えての試聴だ。

**手間をかけた磨きの技術が
各製品の音にそのまま反映**

まず、比較対象に第1世代の鏡面仕上げを施した中級モデルKS・Stage201EVO・Iを聴き、次に新世代の1ランク下のKS・Stage121EVO・Iを聴く。レンジの広さは旧201が若干上と感じるが、音の粒立ち良さ、音楽が生き生き鳴るさまは121に軍配が挙がる。以前の101と

201の差はかなり大きかったから、121の音質アップの大きさがはっきりと分かる。

続いて201と同クラスのKS・Stage221EVO・Iを聴く。うわ、一体何だこの音像の実体感！精密な音場設計のなから太く豪快な音像が飛び出してくるような表現だ。こういう音はちよつといままでに聴いたことがない。より粗い番手から6段の磨きを経た効果がはっきり表れている。

次は8段磨かれたKS・Stage321EVO・Iを聴いたが、音場がいつべんに広大無辺の広さを獲得する。しかも、潤いたつぷりかつ有機的で何とも美しい。音像はより磨き上げられ、端正な感じとなる。

最後に10段磨きのKS・Stage621EVO・Iを聴く。一聴少し大人しくなったように感じさせながら、その実とてつもない情報量と品位の高さ、雑味の少なさに驚く。澄み切った音場がどこまでも広がり、音像の生氣と立体感も申し分ない。柄沢氏の手法は「技術の積み重ねがそのまま音に出る」ということにかけて、本当に間違いがない。まさに正しい方向を歩まれているのであろう。